

墨子魯問篇補正

原 孝 治

魯問篇

魯問篇 三代之暴王、桀紂幽厲讐怨行暴、失天下。

○ 讐…于省吾云、讐謂報也。讐怨言報怨。讐怨行暴與上文說忠行義、正爲對文。

魯問篇 毆國而以事齊^①、患可救也。非願^②無可爲者。

① 「事齊」…于鬯云、事齊者、從事於齊。謂與齊戰。非謂服事齊、故曰毆國。

② 「非願」は閒話、「非此願」に作る。吳毓江は「願讀爲原」と云ふも、その例他に有るを知らず。故に今は採らず。

「願」「願」は草體相近ければ、「願」を「願」に誤る。願與固通。逸周書官人の「屏言而弗願」を大戴禮文王官人は「願作固」とし、淮南子說山訓の「被羊裘而質、固其事也」を意林は引て「固作願」に作る。故に今、王念孫の説に従ふ。尙、王念孫は「願上當有此字」とするが、必ずしも補ふ要なし。

魯問篇 刀則利矣。孰將受其不祥。

○「不祥」…小柳云、不祥とは人を殺したる應報を云ふと。

魯問篇 大王俯仰而思之曰、「我受其不祥」。

○「俯仰」…小柳云、熟考の貌と。

魯問篇 鄭人三世殺其父、(甲)而天加誅焉、使三年不全。我將助天誅也。子墨子曰、鄭人三世殺其父、(乙)而天加誅焉、使三年不全、天誅足矣。(二世弑其君)

① (甲)「鄭人三世殺其父、天加誅焉、使三年不全」と(乙)「鄭人三世殺其父、而天加誅焉、使三年不全」とは同文の繰返しなれば、(甲)の「天加」の上に(乙)に據って、「而」字を補ふ。

② 小柳云、「三年不全」とは三年間凶歲なるを云ふ」と。

魯問篇 今又擧兵將以攻鄭曰、吾攻鄭也、順於天之志、譬(猶)有人於此、其子強梁不材。(二)故其父笞之。其鄰家之父擧木而擊之曰、吾擊之也、順於其父之志、則豈不悖哉。

① 譬字の下、「猶」字を補ふ。下文に云ふ、「譬猶小視白謂之白、大視白則謂之黑」と。尙、墨子書中には、「譬猶……」の用法と「譬之猶……」の用法が多用されてゐる。

② 「強梁不材」とは小柳云、「粗暴にして不才なること」と。

魯問篇 攻其鄰國、殺其民^〇、取其牛馬・粟米・貨財、則書之於竹帛、云々

○「民人」は下文には「人民^〇」に作る。下文の「攻其鄰家、殺其人民、取其狗豕・食糧・衣裳、亦書之於竹帛、云々」とは並列。尙、上文には「伐其小家、殺其人民、取其牛馬・狗豕・布帛・米粟・貨財、則何若」と近似の文が有る。今、人民に改む。唯だ、實曆本は「民人」に作る。民人の用例は此處を含めて三例有るのみ。

魯問篇 亦書之〔於〕竹帛、以爲銘於席豆、以遺後世子孫曰、莫若我多。元可乎。

①「竹帛」の上、上文に據って「於」字を補ふ。上文に云ふ、「書之於竹帛」と。

②「席豆」：馬宗霍云、說文巾部云、席藉也。竹部云、竹席曰筵。周禮春官序官、司几筵。鄭玄注云、筵亦席也。鋪陳曰筵、藉之曰席、然其言之、筵席通矣。禮記祭統篇、鋪筵設同几、孔穎達疏云、設之曰筵、坐之曰席、是筵席本一物、析之則異其名耳。劉熙釋名釋牀帳云、席釋也、可卷可釋也。今之席制猶然。說文豆部云、豆、古食肉器也。又云、椀、木豆謂之椀。爾雅釋器云、木豆謂之豆、竹豆謂之籩、瓦豆謂之登。蓋豆爲大名、亦析之而異其名耳。席豆爲起居飲食常用之物、無貴賤共之。貴人爲銘於鐘鼎、故賤人爲銘於席豆也。

③「我多」は上文、「吾多」に作る。實曆本は「我多」に作る。

魯問篇 譬猶小視白謂之白、大視白(則)謂之黑。是故世俗之君子、知小物、而不知大物者、此若言之謂也。

①「小視白謂之白」と「大視白則謂之黑」とは相對する。故に、吳鈔本に従ひ「則」字を削る。

②「此若」：若猶此也(經傳釋詞卷七)。故に「此若」は連文。

魯問篇 楚之南有啖人之國者焉。其(國之)長子生、則解而食之、謂之宜弟。

○「國之」：節葬下篇には、「昔者越之東有軫沐之國者。其長子生、則解而食之、謂之宜弟」と。此に據って、「國之」の二字を削る。

魯問篇 苟不用仁義、何以非夷人食其子也。

○「夷人」：于鬯云、夷人即指啖人之國。

魯問篇 若以翟之所謂忠臣者、^(甲)上有過則微之以諫、^(乙)己有善則訪之上、

○(甲)の「上有過則微之以諫」と(乙)の「己有善則訪之上」とは相對す。尙同中篇に「己有善傍薦之、上有過規諫之」と。「己」は「下」の訛。尙同中篇の注參照。

魯問篇 匡其邪而入其善、尙同而無下比。

○其…其猶於也(古書虛字集釋卷五)

魯問篇 是以美善在上、而怨讐在下、安樂在上、而憂感在臣。

○尙賢中篇には、「是以美善在上、而所怨讐在下、寔樂在君、憂感在臣」と、略同旨の文がある。

魯問篇 魯人有因子墨子而學^(數)其子者。其子戰而死。其父讓子墨子。子墨子曰、子欲學子之子。今學成矣。戰而死、而子^(數)

糧。

○「學」…于省吾云、按、學其子不詞。學應讀作數。書盤庚、盤庚敷于民。僞傳、敷教也。下云、子欲學子之子。今學成矣。二學字亦應讀作數。

魯問篇 翟嘗計之矣。翟慮耕而食天下之人矣。盛然後當一農之耕。分諸天下、不能人得一升粟。籍而以爲得一升粟、其

不能飽天下之飢者、即可睹矣。翟慮織而衣天下之人矣。盛然後當一婦人之織。分諸天下、不能人得尺布。籍而以爲得尺布、其不能煖天下之寒者、既可睹矣。翟慮被堅執銳、救諸侯之患〔矣〕。盛然後當一夫之戰。一夫之戰、其不

〔能〕御三軍、既可睹矣。

① (甲)「翟慮耕而食天下之人矣。」 } 其不能飽天下之飢者、既可睹矣。 }

(乙)「翟慮織而衣天下之人矣。」 } 其不能煖天下之寒者、既可睹矣。 }

(丙)「翟慮被堅執銳、救諸侯之患〔矣〕。」 } 一夫之戰、其不〔能〕御三軍、既可睹矣。 }

(甲)と(乙)は食と衣とについて述べて對である。(丙)も「翟慮」から始めて「既可睹矣」で終る所を見ると、(甲)・(乙)・(丙)の三條は並列であったと考へられる。(丙)は軍事)として、(丙)では上の「一夫之戰」と下の「一夫之戰」との間に(甲)の「分諸天下、不能人得一升粟、籍而以爲得一升粟」と(乙)の「分諸天下、不能人得尺布、籍而以爲得尺布」に相當する部分が脱落してゐると考へられる。

② 「籍而」…諸葛蠡云、籍而猶云假令(タトヒとルビ有り・墨子箋)。「籍」と「藉」とは通用。籍は假令之辭(正字通)、而訓爲如、又訓爲若(經傳釋詞卷七)、故に、籍而は連文。

③ 「御」…于省吾云、御之言禦也。其不御三軍、謂其不能禦三軍。以上文例之、或不下脫能字。亦未可知。

魯問篇 故翟[○]以爲雖不耕織乎、而功賢於耕織也。

○「故翟」(耕織也)は上文の「故翟以爲雖不耕而食飢、不織而衣寒、功賢於耕而食之、織而衣之者也」を要約したもので、重複である。或は後人の附加か。此の十六字を削る。

魯問篇 子墨子曰、籍[○]設[○]而天下不知耕、教人耕與不教人耕而獨耕者、其功孰多。

○「籍設而」…「設」は假設の辭。故に、籍設而は三字の連文。上文の「籍而」の注參照。

魯問篇 公尙過許諾。遂爲公尙過、束車五十乘、以迎子墨子於魯。(公尙過)曰、吾以夫子之道、說越王。

○「曰」字の上に、上下の文に據って「公尙過」の三字を補ふ。

魯問篇 苟能使子墨子至於越而教寡人、請裂故吳之地方五百里、以封子[○](墨子)。

○「以封子」…陶鴻慶の校に従ひ「墨子」の二字を補ふ。陶云、「以封子、依上文當作以封子墨子」と。吳毓江說同じ。吳汝論の點勘本は「以封子墨子」に作る。

魯問篇 奚[○](能)以封爲哉。

○「能」…于鬯云、能字猶恐衍文。奚以封爲哉。義自明、不必贅。能字或當在上文聽我(吳氏校注 我作吾)言之上。而錯在此、則未可知。

魯問篇 子墨子游魏越。〔魏越〕①曰、既得見四方之君、子則將先語。〔奚〕②

① 内容上から「曰」の上に「魏越」二字を補ふ。

② 「先」…吳汝綸云、先乃奚之譌。

魯問篇 子墨子曰、〔出曹公子而於宋。三年而反、睹子墨子曰、云々〕

○ 「曰」、「而」…于鬯〔士〕云、「曰字、而字、王念孫雜誌竝以爲衍。然曰字信衍矣。而字恐是曹公子之名。故下文云、今而

以夫子之教〔吳氏校本作故〕家厚於始也。而、正曹公子自稱其名也。…則何疑乎以而爲名。然則而不可謂衍。」尙、曰字、聞話に無し。又、兪越云、「出當爲士字之誤、士與仕通」と。

魯問篇 今而以夫子之故、家厚於始也。有家厚。謹祭祀鬼神。

○ 「有家厚」…馬宗霍云、「孫詒讓謂『此與上文複、疑厚當爲享、有讀爲又、言又於家爲享祀』。餘謂孫說未塙、此三字即承上文「家厚於始」而申之。「有」猶「已」也。然則「有家厚」者、猶言既已家厚也。上文言朝夕不給、「弗得祭祀鬼神」。本文言既已家厚、故下文云「謹祭祀鬼神」也。若依孫說作又家享、言又於家爲享祀、則與下文謹祭祀鬼神意複矣」と。

魯問篇 焉在矣來。

○ 馬宗霍云、餘謂「焉」猶「安」也。「矣」當通作「俟」。「俟、待也。…然則「焉在矣來」、即安在俟來也。安在俟

來者、猶言不俟其來而可知也。如此釋之、與上文「乘良馬固車可以速至」意正相貫、似無脫誤。

魯問篇 言義而弗行、是犯明也。

○「犯明」：馬宗霍云、犯明猶言害於明也、亦即不明之意。賈子大政篇上云、知善而弗行、謂之不明。與墨子此文可相參會。

魯問篇 祿勝義也。

○「祿勝義也」の後、馬驩の釋史は文の順序に吳氏校注本と相違が有る。先づ、「祿勝義也」に續いて、「公輸子謂子墨子曰、吾未得見之時」より「子務爲義、翟又將與子天下」迄の八十二字（字數は吳毓江墨子校注本による。以下同じ。）が有り、次に公輸子削竹木以爲鶻」より「不利於人、謂之拙」迄の七十六字、續けて「昔者楚人與越人舟戰於江」より「故我義之鉤強、賢子舟戰之鉤強」迄の二百五十九字が来る。

所で、魯問篇は傳本によって採録内容及び順序に相違が有るので、それについて記して置かう。

道藏本・唐堯臣本・江藩刻本・茅坤批校本・芝城銅活字翻印本は吳氏校注本と同じ（以下吳氏校注本に比す）。

沈津纂墨子類纂本の魯問篇は最初に「魯之南鄙人有吳慮者」雖不耕織乎而功賢於耕織也」の一節が有り、次に「公輸子削竹木以爲鶻」不利於人謂之拙」迄の一節、次に「公輸盤爲楚造雲梯之械成、將以攻宋」争於明者衆人知之」が来る。この「公輸盤爲楚造雲梯之械成云々」の一節は吳氏校注本（道藏本・唐堯臣本・江藩刻本・茅坤批校本・芝城銅活字翻印本同じ）では公輸篇である。

潛菴子纂墨子刪定本（子彙本）・陳仁錫撰墨子奇賞本には「子墨子謂魯陽文君曰、世俗之君子皆知小物而不知大物

云々」の一節を缺くが、他は吳氏校注本以下の全本に同じ。

李贄撰墨子批選本は「魯君謂子墨子曰、吾恐齊之攻我也、可救乎」過必反於國」の節の後半が無く、又「孟山譽王子闔曰」故曰、難則難矣。然而來仁也」、「子墨子使勝綽事項子牛」祿勝義也。「昔者楚人與越人、舟戰於江」故我義之鉤強、賢子舟戰之鉤強」の三節が無い。

焦竑・翁正春・朱之蕃撰墨子品彙釋評本、陳深撰墨子品節本、陸可教編、李廷機校墨子玄言評苑本、金堡校・范方評墨子は「魯陽文君謂子墨子曰、有語我以忠臣者」此翟之謂忠臣者也」の一節有るのみ。

歸有光・文震孟撰墨子評點本には魯問篇が無い。(魯問篇の古版本上の相違については、拙著「明代墨子摘要」(大東文化大學漢學會誌五十一號・平成二十四年三月十日發行)參照。)

魯問篇 公輸子自魯南游楚、焉始爲舟戰之器。

○「焉」…焉猶於是也(經傳釋詞卷二)。

魯問篇 故交相愛、交相恭、猶若相利也。

○「猶若」…猶若是連文。經傳釋詞曰、詩小星傳曰、猶若也。亦常語也。字或作猷。爾雅曰、猷若也。猶爲若似之若。尙賢中篇の注參照。

魯問篇 故所爲巧、利於人謂之巧、不利於人謂之拙。

○「所爲巧」は上文の「公輸子自以爲至巧」を承けて云ふ。

(魯問篇 終)

墨子公輸篇補正

原 孝 治

公輸篇

公輸篇 舍其文軒、鄰有敝輦、而欲竊之。

○「而」…而猶則也（經傳釋詞卷七）。

公輸篇 子墨子解帶爲城、以牒爲械。

○「械」…諸葛蠡云、械謂飛梯撞車飛石車弩之具也。

（公輸篇 終）